



図2 集団の構成と課題のタイプ別にみた課題への動機づけの推移

表5 課題への動機づけの分散分析

SV	df	MS	F	
集団の構成 (A)	1	0.01	0.03	
課題のタイプ (B)	1	20.57	59.59	p < .001
課題の提示順序 (C)	1	0.18	0.53	
A×B	1	0.001	0.004	
A×C	1	0.15	0.45	
B×C	1	0.19	0.55	
A×B×C	1	0.13	0.39	
Error	56	0.34		

のタイプ、(C) 課題の提示順序、の3要因について分散分析した結果である。課題のタイプ (B) の主効果が際立っている (p < .001で有意)。乱数表の集計は退屈で、創造性検査の方が好まれていた。これには集団の構成が等質か異質かは関係なく、時期もまったく関係がなかった。

3. 集団の凝集性

集団の凝集性も上記と同じ質問紙によって測定された。ただし、用いられた質問項目数は3個であった。この場合も合計得点は5点尺度に変換された上で分析にかけられた。図3はその得点を実験条件別に図示したものであり、表6は3要因の分散分析にかけた結果を示している。

課題のタイプ (B) の主効果と3要因の交互作用 (A×B×C) が有意であった。前者は上でみた

ように創造性検査の方が乱数表の集計作業より被験者たちに好まれる傾向があり、これが集団の凝集性にも反映したものと解されるが、後者すなわちこれが他の2要因との間で示す3次の交互作用は複雑である。等質集団の凝集性は、創造性検査を前半に行った方が後半におこなうよりも高く、乱数表集計については反対に後半に行った方が前半に行くより高くなっている。他方、異質集団の凝集性は、創造性検査については後半で、乱数表集計については前半で相対的に高くなっている。

以上を要約すれば次のように言うことができよう。本実験で用いられた2種の課題のうち、乱数表の集計作業に対する被験者たちの動機づけは創造性検査に対するよりも相対的に低かった。このことは一部集団の凝集性にも影響を与えたと思わ